

0-1. 喬然（938～1016）の訪天計画と入宋・五台山巡礼・将来品

- ▼喬然の三大将来品 『小右記』永延元年(987)二月十一日条（入洛時の行列）
白檀五尺釈迦像（清凉寺本尊）／舍利奉籠の「七宝合成塔」／一切経（宋版一切経）
- ▼「釈迦像」：清凉寺釈迦如来立像。
 - *北宋の都・汴京（開封）にまつられていた栴檀釈迦瑞像の姿に基づく像
「三国伝来の生身の釈迦」 制作地は浙江省台州
 - †永観元年(983)8月1日出発、18日台州上陸
 - †汴京など、各地をめぐるのち雍熙2年(985)6月27日、台州に戻る。
 - †同年7月21日に釈迦像制作に着手、18日に造り終わる。
 - 像内に仏舎利（歯など）、五臓、菩提樹葉など納入 ⇒ 釈迦像の生身性
- ▼「七宝合成塔」：銭弘俶八万四千塔（鄞県＝寧波阿育王塔に基づく）などと同形式か
- ▼一切経：開版されたばかりの大蔵経（蜀版一切経）
- ▼天元5年（982）「喬然上人入唐時為修善願文」（慶滋保胤）
 - 「宋地で五台山に参り文殊の即身に逢い、中天竺に詣で釈迦の遺跡に礼せん」文殊の生身性
 - ⇒「インドをめざすが」「釈迦像将来と五台山巡礼で、縮小実現」（奥 2009） 中天竺行の企図
 - 五台山巡礼：喬然（984年）、成尋（1072年）など
 - ▽聖地五台山の台頭 代宗期（762～779）不空の五台山文殊信仰鼓吹、護国性強調

0-2. ボードガヤ—Bodhgaya 遺跡と金剛座真容像の伝播

- ▼釈迦成道の地 菩提樹／金剛座／金剛座真容像（大精舎本尊仏坐像。菩提像、菩提瑞像、菩提樹像）
 - †金剛宝座：BC3世紀 マウリア朝、アショーク時代の石板 ガチョウと唐草文浮彫
※基部のストゥッコ彫刻は4～5世紀
- ▼『大唐西域記』巻8所説 7世紀前半、玄奘訪問時の状況
 - ▽金剛座
 - ・・・世の季となり正法が次第に衰え、沙や土が覆いかぶさり、見ることができなくなってきた。仏が入涅槃された後に、諸国の国王は仏が金剛座の大きさを説かれたのを聞き、二体の観自在菩薩の像で南北の境界の記として、東を向けて安置した。この話を老人に聞くと、「この菩薩の像の体が埋もれて見えなくなると、仏の教えは滅び尽きるであろう」ということである。今は南隅の菩薩は埋まって胸を過ぎるほどである・・・
(平凡社中国古典文学大系・水谷真成訳。以下同)
 - ▽菩提樹
 - ・・・幹は黄白色で、枝葉は緑をしており、冬も夏も葉の落ちることなく、光沢も変わりがない。毎年如来の涅槃の日になると葉は全部凋んで落ちてしまうが、暫くするとまたもとのようになる。この日は諸国の君王や諸方の僧俗など数千万の人々が、召集されなくても集まり、香水や香乳をそそぎかける。そこで音楽を奏し香花を列ね、燈火をつけ夜を日に継いで争って供養をする（同）。

▽金剛座真容像（菩提像、菩提瑞像、菩提樹像）

†触地印（降魔印）の坐仏、装身具着用

精舎の中には仏像がりっぱな姿で脚を組み、右足を上に置き、左手をおさめて（股に置き）、右手は垂れて（降魔印の相をなし）東面して坐していた。厳かな様子は真にそこに仏が居られるが如くであった。・・・（人々は）乳の上の未完の部分をつらな宝石をまじえ埋め、珠の瓔珞に宝冠など珍しい宝で飾りたてた。（同）

†作者は釈尊を直接知る弥勒菩薩（の化身のパラモン）

†ボードガヤー巡礼と金剛座真容像に対する供養、唐宋時代に盛行

▼菩提瑞像の形式を踏襲する造像（宝冠・装身具着用例多数）

†唐代中国で盛行 「インドの仏」としての認知 伝播時の媒体：磚仏など

東アジア的展開 慶州・石窟庵など 新羅における触地印大流行

†五臓納入による生身化の事例

『酉陽雜俎前集』巻6（会昌年間＝841～846撰）「成都寶相寺偏院小殿中，有菩提像。其塵不集如新塑者。相傳，此像初造時，匠人依明堂先具五藏，次四肢百節。將百餘年纖塵不凝焉。」

※明堂＝経絡を示した人形。人体模型？

†日本へは鑑真・円仁・円行ら将来（作例僅少、東大寺二月堂光背・頭塔等。盛行せず）

†玄奘三蔵絵に描かれた菩提樹と二観音・・・鎌倉時代の日本におけるイメージ

宝座／大精舎、仏坐像は描かれない

1. ボードガヤー出土漢文石刻史料

▽10-11世紀、計6点 Cunningham (1892)、Chinese Inscriptions. No.1. ～6.

(1) 懷問の第3回訪天とボードガヤーにおける宋皇帝名義の立塔・立碑・法要 ⇒ 資料①

▼資料① Chinese Inscription No.4. (Chavannes 5) 原石は現所在不明

北宋・明道2年(1033)1月19日(刊刻：景祐3年＝1036)

【釋文】 碑額：大宋皇帝／皇太后爲／太宗皇帝／建塔壹座

本文(全10行)：

大宋

聖文睿武仁明孝德皇帝

應元崇德仁壽慈聖皇太后謹遣僧懷問詣摩伽陀

國奉爲資薦

宗至仁應道神功聖德文武睿烈大明廣孝皇帝

於金剛座側建塔一座

太宗皇帝伏願高步 天宮親承

佛記聿證 眞仙之位常居

釋梵之尊誕錫 威靈永隆

基業時明道二年歲次癸酉正月十九日記 [丙子歲／月日刊]

▽北宋 2代太宗(在位976～997)／眞宗(在位997～1022)／仁宗(在位1022～1063)

* 莊獻皇太后劉氏(968～1033)眞宗の皇后。益州人。眞宗崩後簾政、1024年徽号「應元崇德仁壽慈聖」を贈らる。1033年崩、諡号「莊獻明肅」。慶曆4年(1044年)11月「章獻明肅」と改諡。

【訓讀】

(碑額) 大宋皇帝、皇太后、太宗皇帝の爲に、塔壹座を建つ。

(本文) 大宋聖文睿武仁明孝德皇帝、應元崇德仁壽慈聖皇太后、謹んで僧懷問を遣わして摩伽陀國に詣らしめ、奉じて太宗至仁應道神功聖德文武睿烈大明廣孝皇帝を資薦せんが爲に、金剛座の側に塔一座を建つ。太宗皇帝。伏して願わくは高く天宮を歩み、親しく佛の記を承け、聿に眞仙の位を證し、常に釋梵の尊に居り、誕(おお)いに威靈を錫い、永えに基業を隆んにせんことを。時に明道二年、歳は癸酉に次る正月十九日、記す[丙子歲月日、刊む]。

▼懷問の三度の訪天

▽第1次 天禧元年(1017)1月帰朝 梵夾2夾将来

同年12月 遵泰・徳円帰国、梵經及び太宗御製『新訳三蔵聖教序』碑(先に立石)の拓本将来

▽第2次 天聖元年(1023)帰国 梵夾25夾将来

太宗御製「新訳三蔵聖教序」碑を立碑。仏陀伽耶で真宗の爲に立塔・祈福の法会

随行の伝法院梵学僧・文渉、「堅固鎧宮寺」へ

▽第3次 寶元2年(1039)5月 沙門得濟、永定、得安らと帰国

※天聖10年(1032)1月 汴京某寺所属懷問、三たび往天を志す。

†伝法院に制し仏陀伽耶の「弥勒の成す所の釈迦像」に献ずる19条の大衣1、塗千仏幡6、

塗金五百羅漢幡2、などを用意させる。⇒金剛座真容像への奉獻

「塗金於大衣為賢劫千佛像、飾以金塗銀條(金+天)御飛白書佛法清淨字於其裏、印以御前龍紐之文。并製塗金千佛幡六、塗金五百羅漢幡二、以副之」。

†夏棘に詔、『懷問三詣西天中印度摩伽陀國記』撰述

†中書・枢密の宰執、仁宗が飛白文字で御書「仏法清淨」と題したことを讚美、

各々五言の『御飛白釈迦仏袈裟詩』を制作、献上

†仏陀伽耶の菩提樹側に二塔を建設して真宗の聖教序、仁宗御製『三宝讚』、莊獻皇太后製『発願文』を刻石、金剛座の側に立塔(『景祐新修法宝録』18)。

⇒立塔を述べたのが出土品。日付は1033年1月19日

†帰国時の将来品 佛骨舍利、貝葉梵經、貝多子、菩提樹葉、無憂樹葉、菩提子念珠、西天碑十九本

▼伝法院による巡礼協力と御製 『大中祥符法宝録』(『大中録』)、『景祐新修法宝録』(『景祐録』)等

▽伝法院：太平興國7年(982)、太平興國寺内に譯經院完成、翌年改稱。このとき印經院も設置。

▽太宗・真宗の經序製作・立碑と天息災 Devasantika(法賢、?-1000。北宋期の經典漢訳のリーダー)の関係

唐太宗「大唐三蔵聖教序」及び高宗「大唐三蔵聖教序記」と玄奘の關係に準える構図

▽太宗御製「新訳三蔵聖教序」

雍熙3年(986)10月、傳法院に(宰相李昉、天息災に)下賜。

御書院に付して刊石(『參天台五臺山記』卷6、『宋會要』道2-7など)。

参考：端拱元年(988)雲勝書、開利寺(旧・香積寺)安置『大宋新訳三蔵聖教序碑』(現西安碑林)

▽真宗御製「繼作聖教序」

咸平2年(999)7月22日、法賢(天息災の改名)らから請われた御製を傳法院に下賜(『大中録』卷11・12など)。その後同序の石版を降賜、譯經堂にて太宗の「聖教序」碑と對置することを乞う請願、4度目に認めらる。

大中祥符2年(1009)秋、御製御書の品が降賜(同卷15)。

▽皇太后「発願文」と仁宗御製「三宝讚」

天聖 8 年 (1030) 夏 「発願文」を伝法院に付し、経録に付す。同 9 年 (1031) 閏 10 月 25 日、伝法院に「三宝讚」を付し、法護・惟浄に注釈を許す。11 月、夏辣・王曙、『三宝讚』『発願文』の注釈を請い、12 月許可。

★懷問第三次訪天 二文に加え眞宗御製「繼作聖教序」がボードガヤーに刊石。

同地にはすでに太宗「聖教序」碑あり

⇒兩帝の經序が相對する開封傳法院譯經堂と同じ狀況が、ボードガヤーにも出現。

(2) 懷問第2次訪天並行期における中国人僧の金剛座供養 ⇒ 資料②③④ 及び⑤ (無記年)

↑懷問、1023 年に第二次訪天から帰国。②③④は滞在に並行する時期に制作。

▼資料② インド博物館目録番號 B. G. 122. Chinese Inscription No.1. (Chavannes 2)

(Beal 1881 a・b に寫眞。Cunningham 1892, Pl. 30., fig.1.) 北宋・天禧 6 年 (1022) 6 月

総高 84.1cm (基部高 10.8cm, 碑面高 54.0cm) 幅 47.4cm 厚 (碑面部) 8.1cm

▽碑額部分 三聯佛龕中龕に釈迦像 (菩提瑞像)。

左右龕に 6 臂の女神立像。マーリーチー Mārīcī (摩利支天)、人面はラーフ Rāhu (羅睺)

▽願主名は「(西河僧) 可蘊」。Cunningham、Chavannes らは「Yunshu 蘊述」とするが、「可蘊述讚」

「可蘊遠別帝鄉」「可蘊遂竭餘資」の「述」「遠」「遂」をいずれも「述」と翻刻、「蘊述」という人名とみたことによる誤読と考証 (Bagchi & Chou1944)

▽東京 (開封) 右街、興教禪院の僧可蘊が千佛佛塔を立て、義清・義璘二人と「金襴袈裟一條」を「摩訶菩提佛座上に被掛」したと述べる。

▽可蘊及び義清、中國側の同時代史料にも訪天僧として名を留める。

「天聖四年 (1026) , 三月, 沙門惠則, 可蘊, 自天竺還, 貢梵經十三夾, 佛舍利, 無憂樹葉。並賜紫衣束帛」(『景祐錄』卷 17)

「天聖二年 (1024) , 秋九月, 沙門義清, 自天竺還, 貢梵經十夾, 佛舍利, 菩提念珠。賜紫衣束帛」(同)

【釋文(抄)】 大宋国傳經講論西河僧[可蘊]述讚佛身座記[可蘊]遠別帝鄉來瞻佛境既觀

異跡靈蹤寧無福善欽讚者乎[可蘊]遂竭餘資於道樹北三十餘步刻鐫千

佛石塔一 所選標三會安足之方財嚴不足以寫心法施剋恭而須腹

聊申荒句以讚無生讚覺座眞容曰 大雄慈氏悲物留眞雖無宣演然

(13 行分略)

詞用讚無生之妙理似持蚊睫揆度穹隆豈知高下微表歸仰之懷今將

讚誦三身妙善兼及刻鐫千聖殊勲並用奉福我本國 明王遐資聖壽

大宋 皇帝伏願命等天池之水滔滔而無減無增福[如神]嶽之山岌岌而

唯高唯峻我 王更願此地當來位繼蟻佉之位他方後世名標月蓋之

名[更有]讚誦異跡靈蹤備錄行記 時大宋天禧年歲次壬戌乙巳月標記

之耳 同礼佛鄉僧東京右街興教禪院義清 義璘 二人同

持金襴袈裟一條於摩訶菩提佛座上被掛已訖寄標於此萬古記之

※[可蘊]：一字分に二字を壓縮して記す。[超凡][心リ]：「超」「リ」を行の右に小字で記す。

[三災][如神][更有]：一字分の區畫に二字を釋文通りの配置で横書する。

【訓讀】大宋國傳經，講論，西河僧，可蘊の述べたる，佛の身と座を讚ずるの記。可蘊，遠く帝郷と別れ，佛境に來瞻す。既に異跡，靈蹤を覩，寧ぞ福善無くして欽讚する者ならんや。可蘊，遂に餘資を竭くし，道樹の北三十餘歩に於いて，千佛石塔一所を刻鑄し，三會に遐標し，安足の方とす。財嚴は足らずとも以て心を寫し，法施剋く恭（つつ）しみ而して腹を須い，聊か荒句を申べ，以て無生を讚えん。（中略）今將に三身の妙善を讚誦し，兼ねて及た千聖の殊勲を刻鑄し，並びに用て福を我が本國の明王遐資聖壽大宋皇帝に奉ぜん。伏して願わくは，命は天池の水と等しく，滔滔として減る無く増す無からんことを。福は神嶽の山の如く，岌岌として唯だ高く唯だ峻しからんことを。我が王，更に願わくは此地にては當來の位，蟻佐の位を繼ぎ，他方にては後世の名，月盖の名を標さんことを。更に讚誦有り，異跡靈蹤，備さに行記に録す。時に大宋天禧の年，歳は壬戌に次る乙巳の月，之を標記する耳。同に佛郷を禮する僧，東京右街興教禪院の義清，義璘二人。同に金欄袈裟一條を持し，摩訶菩提佛座の上に被掛し，已に訖り，寄せて此に標し，万古に之を記す。

▼資料③ B. G. 124. Chinese Inscription No.2. (Chavannes 3)

(Cunningham 1892, Pl. 30., fig.2.)

高 40.1cm 幅 17.5cm 厚 5.5cm 北宋・天禧 6 年 (1022) 4 月

【釋文】大宋國東京興教禪院僧 義清 師弟義璘／奉為四恩三有送金欄袈裟一條／
西天佛座上被掛訖并建石塔一／所天禧六年四月日和尚辯正大師

【訓讀】大宋國東京興教禪院の僧義清，師弟義璘，奉じて四恩三有の爲に金欄袈裟一條を西天に送り，佛座の上に被い掛け訖り，並びに石塔一所を建つ。天禧六年四月日。和尚辯正大師。

▼資料④ B. G. 123. Chinese Inscription No.3. (Chavannes 4) Cunningham 1892, Pl. 30., fig.3.)

高 38.4cm 幅 16.1cm 厚 7.4cm 北宋・天禧 6 年 (1022) 4 月

【釋文】大宋國東京啓聖院僧紹頻送金／欄袈裟一條佛座上披掛訖并建／
石塔一所奉答四恩三有迴斯福善／願值龍花天禧六年四月日記

【訓讀】大宋國東京啓聖院の僧紹頻，金欄袈裟一條を送りて佛座の上に披い掛け訖り，並びに石塔一所を建つ。奉じて四恩，三有に答え，斯の福善を迴らし，龍花に値わんことを願う。天禧六年四月日，記す。

▽ 2 点ほぼ同大の長方形石板、奉獻塔の部材か。いずれも 4 行、同年同月の立塔

▽ 1880～1882 年の間、平面圖（圖 5-1）の Z1（大精舎の北、奉獻塔群が立ち並ぶ區域）で出土

▽ 内容：③東京（開封）興教禪院の義清・義璘が金欄袈裟を「佛座上」に掛け、石塔一所を建立

④東京（開封）啓聖院の紹頻が金欄袈裟を「佛座上」に掛け、石塔一所を建立

† ④の人名・寺名、中國側の史料に登場

★紹頻：天聖 6 年 (1028) 「(春三月) 沙門智昇、紹頻，自天竺還貢梵經十一夾、佛舍利、菩提念珠。
並賜紫衣束帛」(景祐録 17)。

★啓聖院＝啓聖禪院：太宗誕生の地に建立、太宗の神御殿あり

太平興國 5 年 (980) 太宗誕生地に開聖禪寺建立 (『仏祖統紀』卷 43)

984 喬然五台山から戻った際、梅檀瑞像は既に啓聖禪院に (盛算『優填王所造梅檀釋迦瑞像歴記』跋)

985 啓聖禪院完成。内寺にあった梅檀瑞像、宝誌の真身等安置 (『太宗実録』卷 33)

1072 成尋参拝。大仏殿本尊丈六弥勒。東大殿「釈迦像」、西大殿は金字・黒字一切經

★義清 (1024 年 9 月歸國)・義璘 (歸國時期不詳)

同年六月の可蘊 (1026 年 3 月歸國) を施主とする資料②にも登場

▼資料⑤ Chinese Inscription No.6. (Cunningham 1892, Pl. 30., fig.6.) 無紀年 原石現所在不明

▽石碑の碑額部分 三連龕, 中央龕に触地印の佛坐像, 左龕に摩利支天

【釋文】 碑額部: 金剛座/佛蓋記

▼巡禮僧による「金剛座」供養と袈裟・寶蓋の寄進

▽②③④: 「金剛座」への「金欄袈裟」奉獻 ⑤: 「金剛座」への寶蓋の奉獻

▽被掛の対象は宝座? 仏像?

† 『出三藏記集』 卷 15 「又觀泥洹堅固之林, 降魔菩提之樹。猛, 喜心内充設供一日, 兼以寶蓋大衣, 覆降魔象」。

『高僧傳』 卷 3・智猛傳 「又觀泥洹堅固之林, 降魔菩提之樹。猛喜心内充設供一日, 兼以寶蓋大衣, 覆降魔像」。

(T55・113c 及び T50・343b)

† 『大唐西域求法高僧傳』 卷下 「從此行數日。先到那爛陀敬根本塔。次上耆闍崛見氎衣處。後往大覺寺禮眞容像。

山東道俗所贈絁絹, 持作如來等量袈裟, 親奉披服。濮州玄律師附羅蓋數萬, 爲持奉上。曹州安道禪師寄拜禮菩提像, 亦爲禮訖」 (T51・8b)。

† 『佛祖統紀』 卷 43, 太平興國 8 年 (983) 条 沙門法遇が, 「中天竺金剛座」を供養すべく「龍寶蓋」と「金欄袈裟」を造らせる (T49・398c-399a)。「像」の語なし

† 『華嚴經傳記』 卷 1 地婆訶羅 Divākara (613-687) の帰国時 (垂拱 3 年 = 683 頃), 「菩提樹像」を供養すべく「緋羅珠寶の袈裟」を賜る (T51・154c)

† 『佛祖統紀』 卷 43, 太平興國 7 年 (982) 条 成都の沙門光遠による西天竺王子沒徒曩の「表」など上進三藏施護 Dānapāla (?-1017) の訳文「金剛座釋迦如來袈裟一領」(『宋史』 卷 490 「金剛吉祥無畏坐釋迦聖像袈裟」) を賜い, 披挂して供養したとの記載 (T49・398c)。

† 『大中錄』 卷 16 大中祥符 4 年 (1011) 6 月 「是年六月, 詔本院 (傳法院) 造金欄袈裟以賜天竺沙門覺稱, 齋還本國金剛座被於聖像。覺稱復獻頌爲謝。(略) 今得見王賜法衣, 已獲大利還鄉國。我王大恩大慈惠, 賜袈裟衣被佛身。其衣製作遵法儀, 重三寶故淨心施。佛教中爲大供養, 自利他悉清淨。願此布施果無虛, 一切眾生離貧苦。(略) 是秋七月, 覺稱還天竺, 上遣中使撫慰, 仍賜裝錢二萬并茶藥等」。

★被掛の対象: ①大精舎背後の金剛宝座直上の仏像 (亡失) の可能性

②「金剛座」が大精舎全体を意味している可能性 も考慮に

▼繼西域行程 (范成大 『吳船録』 卷上 峨眉山牛心寺記) 「金剛座は菩提宝座城の中にあつて東面」

業姓王氏。擢州人。隸東京天壽院。乾德二年。詔沙門三百人。入天竺求舍利及貝多葉書。業預遣中。至開寶九年始歸。寺所藏涅槃經一函四十二卷。業於每卷後。分記西域行程。雖不甚詳。然地里大略可考。世所罕見。錄於此以備國史之闕。(略) 南行十里渡洹河。河南有大浮圖。自鹿野苑西至摩迦提國。館於漢寺。寺多租入。八村隸焉。僧徒往來如歸。南與杖林山相直。巍峯巋然。山北有優婆掬多石室及塔廟故基。南百里有孤山。名鷄足三峯。云是迦葉入定處。又西北百里。有菩提寶座城。四門相望。金剛座在其中東向。又東至尼連禪河。東岸有石柱。記佛舊事。自菩提座東南五里至佛苦行處。又西三里至三迦葉村及牧牛女池。金剛座之北門外。有師子國伽藍。又北五里至伽耶城。又北十里至伽耶山。云是佛說寶雲經處。又自金剛座東北十五里至正覺山。又東北三十里至骨磨城。業館於鰓羅寺。謂之南印土。諸國僧多居之。又東北四十里至王舍城。東南五里有降醉象塔」 (T51・981b)。

▼伝法衣としての「金欄袈裟」

▽ブツダガヤへの袈裟奉獻は宋以前からあるが、北宋に入り「金欄袈裟」登場

金欄: (一般的に) 「地色を背景に金一色で文様を織り表した生地」

▼積尊所用「金縷袈裟」 袈裟の流れ：姨母⇒積尊⇒迦葉⇒弥勒

▽『大唐西域記』卷6・劫比羅伐窣堵國 積尊歸郷に関する諸聖蹟の記事

「其側不遠有窣堵波，是如來於大樹下，東面而坐，受姨母金縷袈裟。次此窣堵波，是如來於此度八王子及五百釋種」
(T51・901c～902a)。

▽同卷9・摩揭陀國下「莫訶河東入大林野，行百餘里，至屈屈(居勿反)吒播陀山(唐言雞足)，亦謂寔盧播陀山(唐言尊足)。(略)如來化緣斯畢，垂將涅槃，告迦葉波曰。(略)我今將欲入大涅槃，以諸法藏囑累於汝，住持宣布，勿有失墜。姨母所獻金縷袈裟，慈氏成佛，留以傳付。(略)迦葉承旨，住持正法。結集既已，至第二十年，厭世無常，將入寂滅。乃往雞足山，(略)既入三峯之中，捧佛袈裟而立，以願力故，三峯斂覆，故今此山三脊隆起。當來慈氏世尊之興世也，三會說法之後，餘有無量憍慢眾生，將登此山，至迦葉所。慈氏彈指，山峯自開，彼諸眾生既見迦葉，更增憍慢。時大迦葉授衣致辭，禮敬已畢，身昇虛空，示諸神變，化火焚身，遂入寂滅(略)」

(T51・919b)。

▽『釈迦方志』卷下(雞足山の項)「尊者大迦葉波。於中寂定故因名焉。初佛以姨母織成金縷袈裟。傳付慈氏佛。令度遺法四部弟子。迦葉承旨佛涅槃後第二十年。捧衣入山以待慈氏。上有一塔。靜夜望之明炬自照(T51・963c)。

▽『法苑珠林』卷29「即大迦葉波於中寂定處也。初佛以姨母織成金縷大衣袈裟，伝付弥勒」(T53・504a)。

▼禪宗史書の積尊所用「金襴袈裟」唐以降に用例多数

▽『歴代法宝記』「所以釋迦如來傳金襴袈裟。令摩訶迦葉在雞足山。待彌勒世尊下生分付」(T51・183b)。

▽『無門闕』卷1「迦葉因阿難問云。世尊傳金襴袈裟外。別傳何物」(T48・295c)。

▽『五燈會元』卷一・西天祖師・第二阿難尊者「一日問迦葉曰。師兄。世尊傳金襴袈裟外。別傳箇甚麼」。

▼袈裟着装による仏像への生身性賦与 唐皇帝による五台山文殊供養、など

(3)「大漢國」僧によるボードガヤーへの寄進 → 資料⑥

▼資料⑥ Chinese Inscription No.5. (Chavannes 6) (Beal 1881 a・b に写真。Cunningham 1892)

西暦1000年以前 (Cunningham)

†最大高27.1 最大幅50.0 最大厚7.1 基壇部高5.4 銘記界幅1.5～1.8

†過去七仏+弥勒菩薩立像 釈迦像は金剛座真容像を立たせた形式 傘蓋を伴う

【釋文】大漢國僧志義先發願勸三十万人修上生行施三十万卷上生經自誦三十万卷如上功德迴迴同生内院今至摩竭國聖金剛座伏遇唯識座主歸寶与諸大德等同發願往生内院三十万人中歸寶為第一人志義第二廣峯第三下依然次第惠崑／重達全遵緣真義暹 惠秀智永奉昇清蘊等並願親奉弥勒慈尊今結良緣成此七仏已為記之

【訓讀】大漢國僧の志義、先に發願すらく、三十万人に勸めて上生の行を脩せしめ、三十万卷の上生經を施し、自ら三十万卷を誦し、上の如き功德、迴迴して同に内院に生ぜんことを。今摩竭國の聖金剛座に至り、伏して唯識座主歸寶と諸の大德等に遇い、同に内院に往生せんことを發願す。三十万人中、歸寶を第一人と爲す。志義を第二、廣峯を第三とし、下は依然として次第す。惠崑、重達、全遵、緣眞、義暹、惠秀、智永、奉昇、清蘊等、並びに親しく弥勒慈尊を奉ぜんことを願う。今良縁を結びて此の七佛を成し已り、爲に之を記す。

▼五台山仏教文化圏とボードガヤー

▽僧名：志義・歸寶・廣峯・惠巖・重達・全遵・緣眞・義暹・惠秀・智永・奉昇・清蘊

『仏祖統紀』卷43「(端拱)二年。太原沙門重達，自西天還。往反十年。進佛舍利、具菓梵經。

賜紫服，住西京廣愛寺」(T49・400c)。同卷52「沙門重達，自西天還。進佛舍利、梵經」(T49・457a)。

「×二年。○三年=990年」(Chavannes)。

Bagchi、刻銘を「太原僧重達」（中印往復 10 年）に比定、刻銘年代を 981-990 に絞る。

- ▽「大漢國」僧 文面は弥勒信仰濃厚「上生」「慈尊」「往生内陀」
- ※北漢か 自称は「大漢」 979 年、北宋・太宗の親征により滅亡
- 山西省、契丹と緊密な関係、疆域内に五台山を擁する

▼北宋帝室周辺における五台山関連図像

▽太平興國 4 年（979）北漢を滅ぼし太原に入った太宗の許を訪れた、五臺山の山門都監・淨業
「山門聖境圖」「五龍王圖」奉獻（『廣清涼傳』卷下、T51・1123c）

▽開封大相国寺 後門東西壁 高文進画「五代文殊変相」「峨眉普賢変相」（劉道諱『聖朝名画評』）

▼北宋期五台山図の前史と現存作例

▽五台山図 濫觴 敬宗・長慶 4 年（824）「吐蕃遣使求五台山図」（『旧唐書』卷 12 上）

★敦煌の五台山図

中唐～ 第 222 窟・第 159 窟・第 237 窟・第 361 窟 晚唐 第 9 窟・第 144 窟
五代 第 61 窟 安西榆林窟第 19 窟・第 31 窟・第 3 窟 肃北五個廟石窟第 1 窟
† 第 61 窟（947～55 頃） 瑞祥図像最多

「羅漢一百五十現」「菩薩千二百五十現」「仏手雲中現」「通身光現」「聖灯現」「大毒龍二百五十現」
「金仏頭雲中現」「娑竭羅龍王現」「大力金剛現」「聖仏足現」「麒麟雲中現」「金龍雲中現」「金塔現」「雷電現」
「五色光現」「阿育王瑞現塔」「金色世界現」「白鶴現」「靈鳥現」「功德天女現」「金鍾現」「雷電雲中現」
「師子雲中現」「化金橋現」

★五台山文殊菩薩図 ギメ美術館敦煌画 五台山の風景＋文殊像

★河北正定・隆興寺（龍興寺）大悲閣（佛香閣）東壁塑壁の普賢（＋文殊）

† 峨眉山普賢・五台山文殊？

† 現在亡失。古写真存在。三区画、塑壁

① 普賢菩薩騎象像、眷属・天部等随従。大海に飛雲、遠山 天蓋・仏閣・宝塔・飛天・龍等 乘雲
敦煌 61 窟・五台山図の普賢来現部分に構成要素類似。五台山文殊図像の復元的理解にも資する
開宝年間の作か ⇒ 天部像は邯鄲出土の唐代造像に酷似

※② 文殊及び眷属 ③ 及び後壁：千仏 いずれも清朝の改修？

⇒ 北宋初期、勅願の中央作、確定的

⇒ 大相国寺後門東西壁 高文進「五臺峨眉山文殊普賢変相」との間に連続性？断層？

ギメ文殊との共通項：普賢像の着衣、祥瑞の描写、景觀描写等

※参考 峨眉山普賢 966 峨眉山普賢寺の仏像莊嚴

987 勅命で奉還・瓔珞・袈裟奉獻

▽大悲閣 隋・開皇 6 年（586）郡の西方に創建、当初龍藏寺と命名 龍藏寺碑

唐・自覚禪師 金銅観音大像建立も、五代のとき契丹の다가兵火にかかり上半身失う

後周・顕徳年間、残銅を毀ち銭を鑄て軍需を佐く。

北宋・建徳元年（963）隆興寺鑄金銅像并蓋宝閣 碑文 後世の翻刻？

開宝 4 年（971）勅命により寺地を現在地に移し、金銅大悲観音菩薩像鑄造 大悲閣建造開始

太平興国 7 年（982）～端拱元年（988）大規模伽藍造営・完成

端拱 2 年（989）重修龍興寺大悲象（像）并蓋閣碑銘

▽現状 建物本体は共和国成立後 基壇＋本尊千手観音＋石造須弥壇は当初

▼生身の仏菩薩をめぐる営為と文物

- ①中国の靈山に現在すると観念された諸尊 五台山文殊、峨眉山普賢、天台山五百羅漢・・・
- ②生身の仏菩薩への奉獻行為（袈裟など）、尊像における生身性の希求（裸形着像など）
- ③仏法の付嘱（伝法）の観念

▼東アジア所在仏教文物における仏法・仏教尊の「現前性」「継承性」表出 二つの様態

- ①伝来モデル 時間軸/空間軸（「東伝」の重視） 即物的継承性/観念的継承性
起点としての釈迦像（降魔成道/涅槃）、舍利など聖遺物、經典（貝葉写本など）など
⇒ 生身（⇒弥勒） 媒介者：玄奘ら取經僧 インド世界との交流
- ②影現モデル 飛来 湧現 勸請 聖地表象 儀礼空間の舞台装置

▼五百羅漢幡奉獻の意義 ⇒ 「空間・時間の両面にわたる佛法相承を象徴する主題」として、菩提瑞像に奉獻する品に表された？ 同時に「生身の五百羅漢と邂逅できる場が中國にも存在し、厚く崇敬されていること」を示す？ 五百羅漢：開封大相国寺に彫像二組

▼伝法院と「仏教東伝」をめぐる営為 図式化・可視化の様相/皇権との関係

▽天竺僧覚称の事績と伝法院（拙稿 2019）

†『仏祖統紀』卷 44「中天竺沙門覺（稱・法）戒來朝，進舍利、梵夾、金剛座真容、菩提樹葉。召見便殿，尉勞甚厚，館於譯經院。稱進讚聖頌，詔性淨譯之。稱謂學士楊億曰，入此國見屠殺猪羊市肆懸肉，痛不忍觀。西竺食肉五辛者驅出城，故無貨者。心不欲久居此。願至五臺禮文殊，即還本土。晉公丁謂問之曰，數萬里遠來，更何所為。稱曰，并欲禮宣律師塔耳。及還詔賜金欄袈裟奉安金剛座。及賜裝錢茶果」（T49・404b）。

†郭若虛『图画見聞志』卷 6「大中祥符初，有西域僧覚称来，館於興国寺之伝法院。其僧通四十餘本經論，年始四十餘歲。丁晉公延見之，嘉其敏惠。後作聖德頌以上，文理甚富，上問其所欲，但云，求金欄袈裟，歸置金剛坐下。尋詔尚方造以給之。覺称自言酤蘭左國人，刹帝利姓，善畫。嘗於譯堂北壁畫釋迦面，與此方所畫絕異」。〔原注〕「昔有梵僧帶過白髭上本，亦與尋常画像不同。蓋西國所稱、髭鬚其真。今之儀相，始自晋戴逵。刻製梵像、欲人生敬、時頗有損益也」。

（大中祥符初、西域僧覚称来たり、興国寺の伝法院に館する有り。其の僧四十余本の經論に通じ、年始めて四十余歳。丁晋公〔丁謂：966-1037〕之に延見し、其の敏惠を嘉す。後に聖德頌を作して以て上るに、文理甚だ富む。上其の欲する所を問うに、但だ『金欄袈裟を求め、歸りて金剛坐の下に置かん』と言うのみ。尋いで尚方に詔して造らしめ以て之に給う。覚称自ら言く、酤蘭左国の人、刹帝利の姓なりと。画を善くし、嘗て訳堂の北壁に釈迦の面を画くに、此方にて画く所と絶えて異なる）。※原注 昔梵僧有りて白髭の上本を帶過す。亦た尋常の画像と同じからず。蓋し西国の称する所にして、其の真を髭鬚す。今の儀相は晋の戴逵より始まる。梵像を刻製することは人をして敬を生ぜしめんと欲するも、時に頗る損益有るなり。

▽①天竺僧覚称、自ら釈尊の面（かお）を描く。その像容ないし画風、中国のものから隔絶。

②覚称の滞在した伝法院の「訳堂の北壁」に描かれる⇒翻訳事業の核心に位置する場所。

③覚称の要望に応え真宗、「金剛座」（他史料では「真容像」）奉獻の「金欄袈裟」を与える。

†元・鄧椿『画繼』卷 10「西天中印度那蘭陀寺僧、多画仏及菩薩、羅漢像，以西天布為之。其仏相好与中国人異、眼目稍大、口耳俱怪、以帶挂右肩、裸袒坐立而已。先施五藏于面背、乃塗五彩於画面、以金或朱紅作地、謂牛皮膠為觸、故用桃膠、合柳枝水、甚堅漬、中国不得其訣也。邵太史知黎州、嘗有僧自西天来、就公廨令画釈迦。今茶馬司有十六羅漢」。

(西天中印度那蘭陀寺の僧、多く仏及び菩薩、羅漢像を画し、西天の布を以て之を為る。其の仏の相好は中国の人と異なり、眼目は稍や大きく、口耳は怪を俱え、帯を以て右肩に掛け、裸袒して坐立するのみ。先ず五蔵を画背に施し乃ち五彩を畫面に塗る。金或いは朱紅を以て地と作し、牛皮の膠を觸と為すが故に桃膠を用い、柳枝水と合し、甚だ堅く漬す。中國其の訣を得ざる也。邵太史(邵博、?-1158)知黎州たりしとき、嘗て僧有りて西天より来り、公廡に就きて釈迦を画かしむ。今茶馬司に十六羅漢有り)。

- ▽①ナーランダーの僧、仏菩薩・羅漢像を「西天の布」に描く。面貌・像容は中国のものと大違い
②尊容の絵画化の過程で五蔵が(「画背」に)描かれたか? 生身仏のインドにおける源流?

2. 北宋期における訳経と僧侶の中天間往来

▽乾徳四年(966)北宋、西竺への求法僧を募り、沙門行勤ら157人が入竺。

その後開宝(968-976)以降、梵夾を来献する天竺僧絶えず

(『長編』、『宋史』本紀、外国六、南宋・志磐『仏祖統紀』卷四三等)。

▽中国史上最後の仏典漢訳事業展開 10世紀漢訳事業のリーダー 三人の訳経僧

法天(?-1001)・天息災(法賢、?-1000)・施護(?-1017)に固定、チーム形成

†北宋における仏典新訳の嚆矢

太平興国5年(980)、「中天竺三蔵」法天による『聖無量寿経』『七仏賛』等

法天 開宝6年(973)入宋、当初鄜州(陝西省富県)に。

訳経 蒲津(山西省永済市)から上進。太宗に迎えられ開封へ(『仏祖統紀』)

訳経タイトルの肩書「西天中印度摩伽陀國那爛陀寺三蔵伝教大師賜紫沙門」

⇒中インド、マガダ国ナーランダー寺の僧と称す

†太平興国5年、「北天竺迦湿弥羅国三蔵」天息災 及び

「烏填曩国三蔵(長編:鄂等答國)施護、T49・398a『仏祖統紀』)来朝。法天も合流

†勅命で太平興国寺の西辺に訳経院建立、同7年(982)6月から開封で本格的な訳経事業開始。

※天息災訳として大蔵経に採録される諸経は「西天中印度惹爛駄羅国(ジャーランダラ国)(実際は北印度に近いパ
ンジャーブ州ジャランダール)『密林寺』の三蔵の訳とする。また『宋会要輯稿』道釈二之六〜七は天息災が「本国の
『密林寺』で声明学に通じたといひ、諸文献のカシュミール出身説は考え難い(船山2015)。

▼仏典漢訳の場と裔然一行 — 太平興国寺と伝法院

†太平興国寺:太平興国2年(977)に龍興寺を改称

寺中の訳経院:中央に訳経堂 東に潤文堂 西に正義堂 翌8年(983)に伝法院と改名

伝法院の西辺に印経院、同年上進された蜀版一切経の版木を収納

†清凉寺釈迦像胎内文書『裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記』(『造立記』)

裔然 雍熙2年3月2日 太宗に朝見、大蔵経(蜀版一切経)5048巻、新訳経41巻、

(太宗の)御製廻文偈頌など下賜される

†同時入宋の盛算(?~1015or961~?)、開封・明聖観音院で開宝寺永安院から借用した「栴檀
釈迦文像略讚』『優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記』を書写、跋文を付す。清凉寺像の由緒の根本史料

▽一行の滞在先

†裔然、983年12月19日に開封入り。21日に崇政殿で太宗に拝謁

『造立記』『盛算記]:左街の「観音院(明聖観音院)」滞在とする

† 中国側同時代史料 「伝法院」を擁する太平興国寺とする
(『宋太宗実録』巻29、同9年(984)3月乙卯付記事など。『宋史』等)

▼天竺⇒震旦⇒日本 奄然周辺における伝法の系譜

† 寛仁3年(1019)3月15日付『太政官牒』

(『伝法灌頂雑要抄』3・裏書、『大日本仏教全書 遊方伝叢書』4)

太平興国8年(984) 盛算、太平興国寺で「中印度那爛陀寺三蔵法天」から「悉曇梵書」を学び、
「梵学翻經三蔵大徳賜紫」の「令遵阿闍梨」から「両界・瑜伽大法および諸尊別法」を受く

† 法天の訳場における令遵の役割

『大中祥符法宝録』巻3 所載・雍熙元年(984)3月 5部6巻の経典

(大乘善見變化文殊師利問法經一部一卷(略)、楼閣正法甘露鼓經一部一卷(略)、金耀童子經一部一卷、較量寿命經一部一卷、分別善惡報應經一部二巻)が「天竺の梵本」から翻訳された際のメンバー構成⇒インド人訳経僧の天息災・法天・施護に次ぐ三人の「筆受」(梵語の語音を漢語に替える)の一人として、令遵登場。

「右經三蔵沙門天息災訳、法天証梵義、施護証梵文、沙門清沼・法定・令遵筆受、沙門常謹・智遜・慧達・實顕綴文、沙門恵温・守巒・道真・慧超・法雲・可瓌・善祐等証義、殿頭高品王文寿殿直劉素監訳。是月五日監使引三蔵等、詣崇政殿捧所訳経具表上進、…(略)」

† 清沼 奄然、洛陽龍門訪問後、985年7・8月に「清沼阿闍梨」から「両部三密大教」「五瓶灌頂」を授かる(『造立記』)。

⇒奄然・盛算 訳場の中心人物だった法天・清沼・令遵との間に、「梵語学習」「密教儀礼」を介した師弟関係を築いたことを公言。伝法院を舞台にした仏教東伝の系譜に連なつたとの自負。将来した仏教と文物の先進性と正統性：「人⇒人の付嘱」を含む「伝法」という大義によって担保。

☆「モノの移動」⇒「伝法」の枠内に納まる営為 という観点

奄然らの行動様式：中天間の関係と同じ図式が反復されている。

3. 訳経僧による聖遺物の将来と奉安・荘嚴 ⇒ 事例 南京長干寺の舍利・阿育王塔の場合

▼北宋真宗期再建以降の南京長干寺塔(大報恩寺塔)

・北宋・大中祥符4年(1011) 演化大師可政、真宗(位997～1022)の長寿と国の安定願い、阿育王塔埋納。

※可政は原址に長干寺(梁武の頃隆盛。唐代には荒廃)を重建、九層仏塔「真身塔」を新建

・北宋・天禧2年(1018) 「真宗の詔勅」により「長干寺」の名を「天禧寺」に改める

九層塔を「聖感舍利塔」と名づく(『仏祖統紀』巻44)

⇒その後消失、1412年、永楽帝、生母のために大報恩寺塔建立発願。のち1431年竣工。皇宮の標準

※琉璃塔 八角九層塔、高78メートル。咸豊6年(1856)、太平天国の兵火で堂塔焼失

† 地宮出土品中における貝葉経の存在。

▼長干寺地宮出土品(2007～発掘) 出土遺物総数12000余件

▽石函 高1.5m 巾0.72m、鉄函 高1.3m 幅0.5m

† 石函側壁を構成する四枚の石板中北壁に長文銘「金陵長干寺真身塔藏舍利石函記」

† 鉄函内に阿育王塔

▽七宝阿育王塔 高 1.2m 木胎（檀木） 銀製鍍金の板をかぶせる

相輪部・屋蓋部・四隅の方立・塔身部・基壇部 塔身四面本生図、四隅に「金翅鳥」
方立外側 各面区画、計 19 場面の仏伝図 方立内側 二面仏坐像、二面仏立像

▽長干寺阿育王塔、方立内側に上に現れた梅檀瑞像

⇒七宝合成塔と梅檀瑞像（ともに奄然将来品）の一体化・・・

▽発現した三種の舍利

(1)「感応舍利」七宝阿育王塔内、漆函、大銀函、鍍金小銀函、水晶瓶に納入 白色透明、芥子状

(2)「仏頂真骨」七宝阿育王塔内、銀槲・金棺に納入 長 5 ㌘、幅 3.5 ㌘、高 3.7 ㌘

(3)「諸聖舍利」地宮から計 9 組発見 数量は数枚から数千枚

▽感応舍利 仏頂骨より前にその名がみえる

†「率彼衆縁、於先現光之地、選彼名匠、載建磚塔」（「石函記」）。

†「（長干寺）国初宮廢、鞠為榛莽。久之、舍利数表見感応。祥符中、僧可政状其跡、並感応舍利投進、有詔復為寺。政即其表見之地建塔、賜號聖感舍利宝塔」。

宋・李之儀（1038～1117）「天禧寺新建法堂記」（『姑溪居士前集』卷37）

⇒可政、真宗に舍利上進。長干寺再建の許諾を得るか 瑞祥としての舍利発現「聖感舍利宝塔」命名

▽仏頂真骨

†仏頂骨を納めた銀槲底部に刻銘あり、仏頂骨舍利は**施護が寄進**したものと明記

† 983 年法遇将来品（『宋史』490、『仏祖統紀』卷 43 等）が知られるが、ほかにも複数あり

† 1026 年志瑜ら献上 1030 年マガダ国義学僧不動護ら貢ず（景祐録）

† 咸平 4 年（1000）8 月 4 日法賢（=天息災）卒。西域で得た所持の仏頂骨献上、伝法院に廻賜

（大中録）⇒法賢将来品は有力候補？ 媒介者として惟浄？

※施護=天息災の従兄弟とする説（『宋会要輯稿』道釈二之六～七） ※天息災・惟浄の師弟関係

※仏頂骨包布の墨書 可政の出自と修学

† 仏頂骨信仰：ナガラハーラ（那揭羅曷国、那竭国）醯羅城奉祀 頂骨舍利 西北インドの聖遺物崇拜

⇒阿育王塔納入の「感応舍利」「仏頂舍利」の意義 舍利取得の二態様に対応 将来／感得【瑞祥】

▼可政（生没年不詳）の長干寺復興

† 北宋・大中祥符 4 年（1011）可政、阿育王塔埋納。鄞県阿育王塔に範をとるか。上に九層塔建立。

▼惟浄（973～1051）の経歴と仏教文物の関係

† 漢人として唯一、訳経三蔵に。南唐後主・李煜の猶子 三歳のとき南唐滅亡

⇒李煜一行とともに開封に入るか。梅檀瑞像とも並行する動き

⇒7歳で開封相国寺にて出家、11歳で伝法院の試験合格、天息災に師事して仏教を学ぶ

太平興国 9 年（984） 梵経念誦の卓越した能力を買われ得度、端拱 2 年（989）に訳経筆受

淳化 3 年（992）「光梵大師」／咸平 4 年（1001）「証梵文」／景德 3 年（1006）「証梵義」

大中祥符 2 年（1010）「訳経文」の号を賜う

† 大中祥符 4 年（1011）長干寺復興事業 ⇒インド仏教の正系に連なることの顕示、

南唐・江南仏教の復興を図る感覚？

† 天禧 2 年（1018）施護示寂後空席だった訳経三蔵に法護とともに昇る。

伝法院主宰、御製仏書編纂に従事、真宗からの信任

† 景祐 4 年（1037）、内庫より仏牙、仏骨を出し法護及び惟浄に詳驗させる（『景祐録』）

【主な参考文献】

和文

- 板倉・塚本 (2021) 板倉聖哲・塚本麿充『アジア仏教美術論集 東アジアⅢ 五代・北宋・遼・西夏』中央公論美術出版
- 奥 (2009) 奥健夫『清凉寺釋迦如來像』, 至文堂
- 上川 (2007) 上川通夫『日本中世佛教形成史論』, 校倉書房
- 佐藤 (2012) 佐藤成順『宋代仏教史の研究』, 山喜房仏書林
- 佐藤 (2013) 佐藤良純『ブッダガヤ大菩提寺—新石器時代から現代まで—』, 山喜房仏書林
- 竺沙 (2000) 竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』, 汲古書院
- 塚本 (1975) 塚本善隆「佛教史料としての金刻大藏經—特に北宋釋教目録と唐・遼の唯識宗關係章疏について」, 『塚本善隆著作集 5 中國近世佛教史の諸問題』, 大東出版社
- 塚本 (2016) 塚本麿充『北宋繪畫史の成立』, 中央公論美術出版
- 常盤・關野 (1976) 常盤大定・關野貞『中國文化史蹟 8 山西・河北』, 法藏館
- 中村 (1977) 中村菊之進「宋傳法院譯經三藏惟淨の傳記及び年譜」, 『文化』41-1・2
- 肥田 (2011) 肥田路美『初唐佛教美術の研究』, 中央公論美術出版
- 船山 (2015) 船山徹「仏典漢訳の分業体制—天息災『訳経儀式』の再検討」新川登亀男編『仏教文明の転回と表現』, 勉誠出版
- 増記 (2015) 増記隆介『院政期佛畫と唐宋繪畫』, 中央公論美術出版
- 水谷 (1971) 水谷眞成『中國古典文學大系 22 大唐西域記』, 平凡社
- 稲本 (2017) 稲本泰生「奄然入宋と「釈迦信仰」の美術—南京大報恩寺址出土品を参照して」, 『日宋交流期の東大寺—奄然上人—千年大遠忌にちなんで—』(『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第15号』), 東大寺・法藏館
- 稲本(2019) 稲本泰生「ボードガヤー出土の10～11世紀漢文石刻資料と訪天僧の奉獻品」(『東方学報』94)

歐文

- Anderson (1883) John Anderson, *Catalogue and Handbook of the Archaeological Collections in the Indian Museum, Calcutta.*
- Bagchi and Chou (1944) Prabodh Chandra Bagchi, and Chou Ta-fu (周達甫) “New Lights on the Chinese Inscriptions of Bodhgaya”, *Sino-Indian Studies*, Vol. 1. 2, Calcutta.
- Beal (1881a) Samuel Beal, “Two Chinese-Buddhist Inscriptions found at Buddha Gaya”, *Royal Asiatic Society Journal for 1881*, Vol. X III, London.
- Beal (1881b) Samuel Beal, “Buddhist Pilgrims from China to India”, *Indian Antiquary*, Vol. X, London.
- Cunningham (1892) Alexander Cunningham, *Mahabodhi or the Great Buddhist Temple under the Bodhi Tree at Buddha-Gaya*, London.
- Chavannes (1896) Edouard Chavannes, “Les Inscriptions Chinoises de Bodh-Gaya : Le Bouddhisme en Chine et dans l'Inde aux X^e et XI^e Siècles”, *Revue de l'histoire des religions*, Vol. XXXIV, Paris.

中文

- 南京市考古研究所 (2015) 「南京大報恩寺遺址塔基與地宮發掘簡報」, 『文物』2015-5
- 祁・周 (2015) 祁海寧・周保華「南京大報恩遺址塔基時代、性質及相關問題研究」, 『文物』2015-5
- 浙江博 (2008) 浙江省博物館『浙江省博物館藏大系 東土佛光』, 浙江古籍出版社, 杭州
- 周 (1957) 周達甫「改正法國漢學家沙畹對印度出土漢文碑的譯釋」, 『歷史研究』6, 北京

韓文

- Nam (2008) 남동신 (Nam Dong-Xin) “보드가야 마하보리사 출토 한비 (Chinese Inscriptions from the Mahabodhi Temple in Bodhgaya)”, *인도연구 (Journal of Indian Studies)*, Vol. 13-1, Seoul.